適応論的視点にもとづく独立性と協調性の日米差の検討

○橋本博文¹・山岸俊男²

(¹ 安田女子大学心理学部心理学科・² 一橋大学大学院国際企業戦略研究科)

キーワード: 文化的信念, 独立性, 協調性

An examination of the Japan-U.S. differences of independence and interdependence from an adaptationist perspective

Hirofumi HASHIMOTO¹ and Toshio YAMAGISHI²

(¹Yasuda Women's University, ²Hitotsubashi University)

Key Words: cultural beliefs, independence, interdependence

目 的

一般に、欧米の文化を生きる人たちは相互独立的な人間観を、日本を含む東アジアの文化を生きる人たちは相互協調的な人間観を共有しているとされる (Markus & Kitayama, 1991)。過去四半世紀にわたって文化心理学の研究が蓄積してきた心や行動の文化差についての豊富な知見は、基本的にこの「相互独立-相互協調」の枠組みのもとで整理されてきたと言って差し支えないだろう。本発表の目的は、この枠組みを適応論的視点から再考するかたちで、心や行動の文化差を理解するための新たな枠組みを提案することにある。

山岸による信頼の解き放ち理論

適応論的視点にもとづく山岸の「信頼の解き放ち理論」(山岸, 1998)によれば、日本のような集団主義的な社会では、他者一般を信頼する傾向性 (すなわち、一般的信頼) そのものは、適応上有利な結果をもたらさないと考えられる——基本的に安心型の社会の内部において、特定の相手との継続的な関係性の中で物事を済ませようとするからである (そもそも一般的信頼は育たない)。一般的信頼を有することの適応価は、当人が身を置く社会の性質に依存するものであり、対人関係における機会コスト (特定の相手との関係を継続することによって手放してしまう、別の相手との関係を持つことによって得られたかもしれない利益) が大きい個人主義的な社会では、信頼が適応価を有する可能性がある。この意味において、集団主義的な社会では、集団内部の成員からの排除の脅威によって個々人の行動がある程度はコントロールされていると考えることができる。そうした社会の性質を考慮すれば、その社会において適応的な行動を下支えしているのは、まわりの他者から排除されないように振る舞うという意味での協調性 (以下、**排除回避の協調性**) である。これに対して個人主義的な社会では、安心型のコミットメント関係を超えて個人の機会追求をめざす行動が適応価を有すると考えることができる。その場合には、対人関係を形成する相手の人間性や行動を予測すると同時に、将来の潜在的対人相手にとって自分自身を予測可能な人間として受け入れてもらえるように自身をアピールするという意味での独立性 (以下、**自己表現の独立性**) が重要となる。

上述した適応論的視点にもとづく独立性と協調性の理解は、従来の文化心理学における理解とはいくぶん異なるものである。例えば従来の研究では、相手の気持ちを察したり相手を思いやりたりすることで他者との調和的な関係を構築するという意味で「協調性」という言葉が用いられることが多かった (以下、**調和追求の協調性**)。また独立性に関しても、他者とは明確に区別された、他者とは異なる独自の存在として自身を定義するという意味で「独立性」 (以下、**独自志向の独立性**) が議論されてきている。本研究の目的は、これらを区別し、心理尺度によって独立性と協調性のそれぞれの側面を弁別するかたちで、日米の文化差を検討することにある。

方 法

対象者 日本人大学生 118 名およびアメリカ人大学生 112 名。
独立性・協調性を測定するための尺度 協調性の二側面を測定するための尺度項目 (Hashimoto & Yamagishi, 2013) を参考にして、適応論的視点から日米差が予測される「自己表現の独立性」と「排除回避の協調性」、さらに文化心理学における枠組みから日米差が予測される「独自志向の独立性」「調和追求の協調性」をそれぞれ測定する尺度項目を新たに作成した¹。日米の大学生には、それぞれの項目について、あなた自身にどの程度あてはまるかを尋ねた (「全くあてはまらない」から「非常によくあてはまる」の 7 点)。

結 果

Figure 1 に見られるとおり、自己表現の独立性尺度の得点と、排除回避の協調性尺度の得点には有意な日米差が示された。しかし独自志向の独立性尺度の得点には日米差が示されなかった。また調和追求の協調性尺度の得点には、アメリカ人の得点が日本人の得点を上回るかたちで日米差が示された。

Figure 1 Comparison of scores on independence/interdependence scales between Japanese and Americans.

考 察

本研究の結果は、独立性と協調性の日米差を適応論的視点から再考する分析枠組みの有用性を示すと同時に、「日本人は調和を尊び、まわりの人たちと協調する」、「アメリカ人は自身を他者とは異なる独自の存在として考えている」というような文化心理学における常識的な理解に対して疑義を投げかけるものでもある。尺度を用いるかたちで文化差を比較することにはさまざまな議論があるが (Kitayama, 2002; Kitayama, et al., 2009; Oyserman, Coon, & Kemmelmeier, 2002), 本発表で提示した分析枠組みをより精緻化していくための研究を重ねていくことが今後の課題である。

¹ 具体的な尺度項目については、大会当日にポスターにおいて示す。